

2022年度を振り返って

高見保育園 園長 近藤昌孝

保育について、2021年度より始めた3～5歳児を基本的にクラス分けせずに保育するオープンスタイルを継続しました。ねらいは、保育所保育指針で求められる「一人一人の人格を尊重し、生活や遊びを通して健やかで豊かな育ちを支え促していく」子どもを権利の主体として考える理念を基に、子ども主体の保育を行うためです。子ども達から「遊びたいおもちゃで遊べる」「遊びたい友達とずっと一緒にいられる」などの声が出たり、小さい子たちが戸惑っていると年長クラスの子も達が教えてあげたり助けてあげたりする姿が見られたり、小さい子たちは大きい子たちの遊びを見たり、教わったりして遊びの幅を広げていました。

給食は、一斉ではなく食べたい子から食べる形をとっています。早く食べたい子からお部屋に入り、たくさん遊びたい子は遊びきってから給食を取ります。生活リズムの違う子ども達が集団で過ごす場ですので、早く登園している子は、早く食べたいだろうし、遅く登園した子は、ゆっくり食べたいこともあるでしょう。また、準備の早い子もいれば、ゆっくり準備をする子もいます。発育の差の大きいこの時期、生活のリズムもそれぞれですから一斉に「いただきます」してしまうと準備の早い子はいつも待たされ、ゆっくり準備をする子はいつもせかされるといことが起きてしまうことがあり、お互いにあまりいい影響があるとは思えません。いろいろな生活リズム、いろいろな個性がありますので、それぞれのリズムに合わせて自分で納得して給食をとることを大切にします。

2022年度は、保育現場における不適切保育などの報道が多々見られましたが、高見保育園の取り組みとして報道がされる前から人権意識の向上に向けたチェックシートにて個々に確認したり、研修にて認識を深めたり、職員会議などで情報の共有を行い、不適切保育及び虐待の防止に力を入れています。

2022年度は、ITC化に取り組みました。保護者の皆様には、登園降園の打刻のお願いをしていますが、登園している子どもの把握等がスムーズに進み、より保育に向き合う時間が増えました。また、保育現場でも各端末で同じ情報が閲覧できるので、その日園内で何があるか、誰が研修で不在かなど、一目でわかるようになり情報の伝達・共有の速さ・質は飛躍的に向上しました。日誌、日報、指導計画、ヒヤリハットの記載などもITCに移行し、職員の負担減はもちろん、端末さえあればデータの閲覧が園内どこでもできるため、知りたい情報がその場で得ることができるなど業務改善に役立っています。

2022年度は、園長・主任（マネージャー）が変わった事から保護者の皆様へ方針や保育の方向性などを丁寧にお伝えする必要性を感じ、懇談会などから始めて保育への説明会や面談の機会を増やしたり、アンケートの回数を増やすなど、保護者への理解と保護者の思いを発信できるような環境づくりを心がけました。保護者アンケートは、年1回の保育全体に対するものの他、行事ごと、不適切保育や保育に対する不安がないかのアンケートなど行いましたが、その中で要望はあったものの保育に対する理解がされていると判断できるような回答が多くみられました。

行事では、「杜のホール」を使用したクリスマスおゆうぎ会を廃止しました。理由として、福祉施設への減免がなくなったこと、および大きなホールを使用して行うおゆうぎや合奏などは完成度が求められるため、現在のようなオープン保育の中で行うことは、方向性と矛盾している事があげられます。かわりに2/11（土）保育室に小さな手作りの舞台を設置して「おたのしみ会」と名称を変えて行いました。子ども達が日頃楽しんでいる絵本から劇あそびにつなげたり、子ども達が踊りのふりつけを考えたりして、子どもが主体的にかかわれるような行事を目指して暖かい雰囲気の中、ささやかですが無理なく開催することができました。今後も、その時の子どもの姿、時代の変化に合わせ、何が最善か模索しながら保育を進めていきたいと思えます。

2022年度 苦情は0件でした。